

「それはない」の意味機能

八木 真生

キーワード 話し言葉、判断の主題、関連の主題、主題を伴わない文

1. はじめに

本研究では、話し言葉でよく用いられる表現「それはない」を考察対象とする。¹以下に例を示す。

(1)ポン州：俺それ聞いてよ、さすがのこの俺も心入れ替えて、ここで恩返しで働いてるんだ。

寅：神父様、ありがとうございます。どうぞこの男を一生奴隷としてこき使ってやって下さい。ありがとうございます。

ポン州：お、おい、ちょっと、それは/* ϕ 」²ないよ、おまえ。今まで一生懸命勤めてきたんだ。このへんで帰してくれるようお前からも頼んでくれよ、な。 [寅]

(2) (大学院生二人の会話)

YK2：(ん?)³じゃ、10年後何してると思います？

TM3：10年後？(うん)あー、せめて常勤講師ぐらいはしたいね。

YK2：ああ。もし10年後学生してたらどうでしょう？

TM3：<笑い> それは/* ϕ 」⁴ないでしょう。 [名大会話]

この2例は「 ϕ ない」での言い換えは不可能である。(1)の「それ」は、「寅が神父に自分を奴隷としてこの先ずっとここで使うように頼んだ」という直前の行為を指示している。また、(2)の「それ」は、「10年後学生を続けている」という直前の相手の発話を指示している。いずれも、指示対象が直前の文脈に存在するにも関わらず、わざわざ「それは～」と主題化しなければならない。

ところで、(1)(2)の「それはない」はそれぞれ、主題を伴わない次の表現で言い換えることが可能である。⁴

(3) ((1)と同じ文脈で) ϕ やめてくれよ。

(4) ((2)と同じ文脈で) ϕ していないでしょう。

しかし、表す意味は「それはない」とは異なる。(1)(2)の「それはない」は、これらの主題を伴わない表現では表せない意味を表していると考えられる。

さらに、(1)(2)の「それはない」と以下の「それはない」を比較してみたい。

(5) (文房具店で)

客：すみません。このボールペンの替えインク、ありますか。

店員：ちょっと待ってね。

(しばらく探してから)

店員：|それは/φ| ないね。ごめんね。 [作例]

(1)の「それはない」をパラフレーズすると、「そんなことはすべきでない」、(2)は「そんなことはありえない」のようになるであろう。他の実例を検討すると、「それはない」は「すべきでない」あるいは「ありえない」のいずれかの意味を表していることが分かる。一方(5)の「それはない」は、いずれの意味も表していない。

そこで本研究は、まず(1)(2)のような「それはない」と(5)の「それはない」との違いを指摘する。そして、「φ～」との比較を通して(1)(2)のような「それはない」の意味機能を明らかにすることを目的とする。さらに、「それはない」が「すべきでない」「ありえない」という意味を表しう理由を明らかにする。同時に、どのような文脈において「すべきでない」という意味を持ち、どのような文脈において「ありえない」という意味を持つか、明らかにする。

2. 先行研究の検討と仮説の提示

2.1 主題の二面性

野田（1996）は主題とは何かを論じている。野田（1996）の分類を踏まえ、本研究で対象とする「それはない」がどのような性格の主題であるか、位置づける。以下に一部を引用する。

「は」が表す主題については、これまで、「なにかについて述べるときのそのなにか」といった説明がされてきた。たとえば、三上章（1970：p.56）は、「Topic-Comment（主題—説明）」を次のように定義している。

- (6)平叙文のかなりの部分は、あるモノ（something）について、あるコト（something）を述べている。このあるモノをtopicと言い、残りの部分をcommentと言う。

しかし、このような抽象的な定義ではなく、もうすこし具体的に主題をみていくと、主題には次の1)と2)の2つの面があることがわかる。

- 1) 判断の主題—そのとき以外のことも考えた判断の対象を表す
- 2) 関連の主題—前の文脈や話の場面と関連があることを表す

1) の判断の主題というのは、その事態がそのときだけでなく、ほかの時間にもおきることを考えたうえでの判断を表す文で、かならず使われるものである。もうすこし具体的にいうと、恒常的な状態を表す名詞や形容詞が述語になっている文や、くりかえしおきる動作やできごとを表す動詞が述語になっている文の主題である。

2) の関連の主題というのは、文章や談話の中の文と文のつながりや、文と話の場面とのつながりをよくするために使われるものである。もうすこし具体的にいうと、前の文脈にでてきたものや話の現場にあるもの、いつでも聞き手の意識の中にあるものなどが主題になる時の主題である。

(野田1996: 279、280)⁵

1) の「判断の主題」の例として(7)を、2) の「関連の主題」として(8)を挙げている。

(7) 蘭島海岸は北海道の西部、日本海に面した海水浴場である。 (同280)

(8) 街はずれの川原の土手に座って、翠と2人でパンを食べていた。

「真夏ももう終わりね。」

翠は言った。 (同280)

1) に関して、「『蘭島海岸』は、文章の中ではじめてでてきたものなのに主題になっているが、これは、判断の主題だからである」と説明している。また、2) に関しては、「(8)の最後の文は、判断がない、その場かぎりの知覚を表す文なのに「翠」が主題になっているが、これは関連の主題だからである」と説明している。そして、「判断の主題は文のレベルのものであり、関連の主題は文章・談話レベルのものである」とする。さらに、両者の関係について、「判断の主題のほうが(関連の主題に)優先すると考えられる」と述べている。

以上が野田(1996)の主張である。ここで、本研究で扱う「それはない」と、これとは異なる性質を持つと思われる「それはない」の例を以下に再掲し、これらを野田(1996)の分類に従って位置づけてみたい。

(9) 客: すみません。このボールペンの替えインク、ありますか。

店員: ちょっと待ってね。

(しばらく探してから)

店員: |それは/φ| ないね。ごめんね。 (=5)

(10) 寅: どうぞこの男を一生奴隷としてこき使ってやって下さい。ありがとうございます。

ポン州: お、おい、ちょっと、|それは/*φ| ないよ (=1)

(11) YK2: ああ。もし10年後学生してたらどうでしょう？

TM3 : <笑い> |それは/* ϕ | ないでしょう。 (=2)

まず(9)の「それ」は、「ボールペンの替えインク」を指示している。「それ」そのものが、発話時点において店にないことをこの文では述べている。この文はつまり、指示対象そのものに関わる発話時点における事象を述べている文であり、「それは」は「そのとき以外のことも考えた判断の対象を表す」判断の主語ではないと言える。では、なぜ「それは」という主題が用いられているのだろうか。「それ (=ボールペンの替えインク) がない」は、「このボールペンの替えインクがあるかどうか」という客の質問に関連することである。関連の主語であることを示すために、「それは」が用いられているのである。

一方(10)(11)はいずれも、「それ」の指示対象そのものが「ない」ことを述べているのではない。そのようなことはすべきでない、そのようなことはありえないという「そのとき以外のことも考えた」叙述のようである。そのことから、「それは」は、関連の主語ではなく、判断の主語であるという予測ができる。

2. 2 判断の主語

2. 1では本研究で扱う「それはない」の「それは」が判断の主語であるという予測を述べた。ここでは、「それはない」と、言い換え可能な主題を伴わない表現（「 ϕ ~」）の意味の違いを探るために、益岡（1987）を参照する。

益岡（1987）では、「属性叙述」、「事象叙述」という表現類型と、有題文、無題文という文の類型の関連を論じている。

2. 2. 1 属性叙述

「属性叙述」とは、現実世界に属する具体的・抽象的实在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる（益岡1987：21）ことであると定義している。

(12)その男は優しい。 (同21)

命題は、対象を表す成分（「その男が」）と対象の有する属性（「優しい(コト)」）から構成され（主語・述語句構造）、文としては原則的に有題文の形式で表されると説明する。上の例では、対象を表す成分は「その男」であり、対象の有する属性は「優しい」である。

2. 2. 2 事象叙述

「事象叙述」とは、現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述する（同21）ことであると定義している。

(13)雷が落ちる。 (同24)

命題は、主要素としての述語（「落ちる」）と、従要素としての補足語（「雷が」）から構成される。また、有題文になるか無題文になるかは、基本的には「既知」・「未知」といった談話のレベルの条件に依存するとしている。上の文は「雷」が談話の中で未知の要素なので無題文だが、既知の場合は有題文になるということである。

2. 2. 3 どちらとも言いがたい例

しかし、実際には、以下のような大変込み入った例も存在すると言う。

(14) 梅原氏の絵は、文句なくごく普通の意味でも美しい。 (同29)

(15) 車窓に迫った山の新緑が美しい。 (同30)

(16) 彼女はきょうはいつもになく美しい。 (同30)

いずれも「美しい」という属性形容詞が用いられているが、3文すべてが属性叙述の性質を満たしているわけではない。(14)は、「梅原氏の絵」の属性を叙述しており、事象叙述文に特徴的な時空間概念は関与しない。これに対して、(15)は、「新緑の色」の属性を叙述することに重点があるのではなく、発話時において発話の場に存在する静的な事態が叙述の対象になっていると言う。時空間概念が関与する事態を叙述しているという点では、事象叙述文に近い性質を持つと考えられる。さらに、(16)は、「きょうは」という時間的限定があるという点では、典型的な属性叙述ではないようだが、「彼女」の有する「美しい」という属性を叙述している。そして、(15)は無題文が、(16)は有題文が用いられていることを指摘している。

以上の例から、同じ属性叙述の文でも、時空間を超えて一般化した叙述もあれば、一般化しない叙述もあり、有題文、無題文どちらの型式で表されるかという問題は、属性叙述か事象叙述かではなく、時空間を超えて一般化した叙述か否かが関わるのではないかという予想が立つ。

そこで、次節3節では、「すべきでない」という意味を持つ例を、4節では「ありえない」という意味を持つ例を検討し、「 ϕ ～」との比較を通して、「それはない」の意味機能を明らかにしていく。

3. すべきでない

以下の2例はいずれも「すべきでない」という意味を持っている。

(17) (博とさくらは夫婦で、「伯父さん」とはさくらの兄のことである。)

博：伯父さんと一緒にしないでくれよ。

さくら：あ、ちょっとそれはないでしょう。 [寅]

(18)私は高校3年生。父は教師で同じ学校に通っています。男子生徒とすれちがうと「おい、あれ山根先生の子違うん」「そのまんまやんか」……。うら若き乙女にそれはないと思いませんか？ [毎日]

(17)の指示対象は「博が『伯父さんと一緒にしないでくれよ』と言ったこと」であり、(18)の指示対象は「男子生徒が自分の顔を見て『(父親の顔)そのままだ』と言ったこと」である。このように、「すべきでない」という意味を持つ「それはない」の例を見ると、「それ」の指示対象が相手あるいは第三者の行為であることがわかる。

(17)の「それは～」を言い換えると、「そんな言い方はすべきでない」などとなるだろう。前節で述べたように、述部の「ない」は、指示対象そのものが「ない」ことを表しているのではない。指示対象(=相手の言い方)そのものだけでなく、常にそのような言い方はすべきでないことを述べている。つまり、当該文は時空間を越えて一般化した叙述をする文である。指示詞「それ」は、上述したように「博が『伯父さんと一緒にしないでくれよ』と言ったこと」という特定の時空間における具体的事象を指示しているが、「それは」が表すのは、「そんな(ひどい)言い方」という、時空間を越えて一般化した事象である。

(18)もやはり、「そんな言い方はすべきでない」と言い換えることができる。男子生徒がした言い方そのものだけでなく、常にそのような言い方はすべきでないことを述べている。

さて、ここで(17)(18)の「それはない」と、同じ文脈で使用可能な「 ϕ ～」を用いた以下の表現を比較してみたい。

(19) (17)と同じ文脈で ϕ やめて (よ)。

(20) (18)と同じ文脈で ϕ ひどい。

(19)では、「 ϕ 」で夫の言い方そのものを受け、「やめて」と述べている。(20)では、「 ϕ 」で男子生徒の言い方そのものを受け、「ひどい」という一時的な感情を述べている。つまり、いずれの文でも「 ϕ ～」は指示対象それ自体を叙述している。

また、同じ文脈で「それはない」を用いると、「そんなにひどい言い方」「そんなに失礼な言い方」「そんなに非情な仕打ち」など、話し手の事象に対する気持ちは表れるようである。一方、「 ϕ ～」ではそのような印象はない。それは、「それは～」が、具体的事象を「そんなにひどい言い方」「そんなに失礼な言い方」などのように一般化して叙述することを表すからである。

逆に言えば、「ひどい」「失礼な」「非情な」など価値判断の対象になるような事象でなければ、一般化して「ない」と述べることはできない。以下の例を見

てみたい。

(21) (母親の髪を引っ張る赤ん坊に)

φ やめて。

[作例]

(22) (21)と同じ文脈で) ??それはないよ。

(21)で母親がしたいのは、赤ん坊がしている行為をやめさせることである。そこで、「φ～」を用いて、赤ん坊がしている行為そのものに対して直接「やめて」と述べている。一方、「それはない」は非常に不自然である。赤ん坊が髪を引っ張るといふのは、ごく普通のことで、「ひどい」などの価値判断の対象になるような事象ではない。したがって、この場合は一般化することができないので、「それは～」を用いると非常に不自然なのである。

尚、「それはない」が持つ「すべきでない」という意味であるが、ある行為があらゆる時空間においても存在しないことを表すことから、道義上すべきでないという意味が生じるのだと考えられる。「それはない」の他にも「～はない」で「すべきでない」の意味を表す例は以下のように存在する。

(23) 親に対してそんな口の利き方はありません。

[作例]

(24) 子：だって…。

親：だってはありません。

[作例]

「それ」の指示対象が相手あるいは第三者による行為である場合の、「それはない」の意味機能を以下にまとめる。

(25) 「それはない」の意味機能①：相手あるいは第三者による行為である指示対象を、時空間を越え一般化して捉え、「ない」と述べる。言い換えれば、当該の事象が道義上すべきでないことを述べる。

さて、冒頭の例（以下に再掲）もこれで説明可能である。

(26) 寅：神父様、ありがとうございます。どうぞこの男を一生奴隷としてこき使ってやって下さい。ありがとうございます。

ポン州：お、おい、ちょっと、それはないよ

(=(1))

(27) (26)と同じ文脈で) φ やめてくれよ。

(=(3))

(26)では、「寅が神父に自分を奴隷としてこの先ずっとここで使うように頼んだ」という具体的行為を「そんなに非情な行為」と一般化して捉え、「ない」と述べている。それに対し(27)の「φ～」は、相手の行為そのものに対して直接「やめてくれ」と述べている。

尚、「それはない」がすべきでないという意味を表すときは、(17)の「それはないでしょう」や(26)の「それはないよ」のように、文末に聞き手への働きかけのモダリティー成分を伴う。一般的にすべきでないことを述べるだけでなく、それが聞き手に向けられていることを示す必要があるからである。⁶

4. ありえない

以下の2例はいずれも「ありえない」という意味を持っている。

(28) 榎崎氏：八六年の総選挙の時、(先生のところへ) 共和から選挙のお手伝い
にきたのでは。

鈴木参考人：それはない。 [毎日]

(29) (浴槽の水を汲み上げる給水ポンプについて)

夫：バケツでやった方が早いんじゃないか。

妻：それはないよ。 [実例]

いずれも、「それ」の指示対象が実現したかどうかあるいは実現するかどうか
わからない事象である。このことは、「～のでは」「～んじゃないか」という可
可能性を問題にする表現が使用されていることから分かる。他にも、「～の可能
性は?」、「～ということはないか」、「～危険があるとの指摘もあるが」のよ
うな表現が用いられている例が多く存在する。

(28)では、過去におけるある事象実現の可能性が、(29)では、未来におけるある
事象実現の可能性が問題になっている。そこで、以下、4. 1では、過去あるいは
現在における当該の事象実現の可能性が問題になっている文脈の例を、4. 2
では、未来における当該の事象実現の可能性が問題になっている文脈の例を
検討していく。

4. 1 過去あるいは現在における当該の事象実現の可能性

(30) 榎崎氏：八六年の総選挙の時、(先生のところへ) 共和から選挙のお手伝い
にきたのでは。

鈴木参考人：それはない。 (=28)

(31) インタビュアー：あなたも警察の事情聴取を受けましたね。

政治家：それはない。 [毎日]

(30)の「それは」を言い換えると、「そんなことはありえない」などとなるだろ
う。直前の質問では「きた」と過去時制が用いられているが、当該文の述部は
「ない」であり、過去時制は用いられていない。当該文では過去の一時点にお
ける事象を叙述しているのではなく、常にそのようなことはありえないことを
述べている。つまり、当該文は時空間を越えて一般化した叙述をする文である。
指示詞「それは」は、「八六年の総選挙の時、(先生のところへ) 共和から選
挙のお手伝いにきた」という特定の時空間における具体的事象を指示している
が、「それは」が表すのは「そんなこと」という、時空間を越えて一般化した事
象である。

(31)も、過去のある一時点における事象を叙述しているのではなく、常にそのようなことがありえないことを叙述している。

さて、ここで(30)(31)の「それはない」と、同じ文脈で使用可能な「 ϕ ～」を用いた以下の表現を比較してみたい。

(32) (30)と同じ文脈で ϕ 来ていない。

(33) (31)と同じ文脈で ϕ 受けていない。

(32)では、「八六年の総選挙の時、話し手が先生のところへ共和から選挙のお手伝いに行ったかどうか」という過去において実現した可能性が問題になっている事象そのものを受け、「来ていない」と述べている。(33)でも、「話し手が警察の事情聴取を受けたかどうか」という事象そのものを受け、「受けていない」と述べている。つまり、これらの文は、指示対象それ自体を受け叙述する文である。

また、同じ文脈で「それはない」を用いると、「そんなにばかげたこと」のような事象に対する話し手の気持ちが表れるようだが、「 ϕ ～」ではそれは表れない。やはりそれは、「それは～」が指示対象を「そんなにばかげたこと」などのように一般化して叙述することを表すからである。

逆に言えば、「ひどい」「失礼な」「非情な」など価値判断の対象になるような事象でなければ、一般化することはできない。

(34) A：お昼食べた？

B：ううん、 ϕ まだ食べていない。

[作例]

(35) (34)と同じ文脈で) ??それはない。

(36)は、相手に関心のある指示対象「お昼」を「まだ食べていない」と述べている。指示対象そのものを叙述する文である。ここでは、「それは～」は非常に不自然である。「お昼を食べる」という事象が「ばかげた」「おかしい」「非常識な」「ひどい」などの価値判断の対象となる文脈は想起しにくい。したがって、この場合は指示対象の事象が一般化不可能なので、「それは～」を用いると非常に不自然なのである。

尚、「それはない」が持つ「ありえない」という意味であるが、実現の可能性が問題になっているその事象があらゆる時空間において存在しないことを表すことから、ありえないという意味が生じるのだと考えられる。

ここまで見てきた例は過去においてある事象が実現したかどうか尋ねる文脈であったが、以下は、現在においてある事象が実現したかどうか尋ねる文脈である。

(36) インタビュアー：だれかに名義を貸しているということはないか。

尾上：それはない。全部自分名義。

[毎日]

(37) (38)と同じ文脈で) ϕ 貸していない。

「それはない」を用いると、「だれかに名義を貸す」という事象を、時空間を越えて一般化した上で否定することを表す。一方「 ϕ 貸していない」では、当該の事象そのものを受け、「貸していない」と述べている。

4. 2 未来における当該の事象実現の可能性

未来においてある事象が実現するかどうか尋ねる文脈においても、「それはない」は以下のように用いられる。

(38) (浴槽の水を汲み上げる給水ポンプについて)

夫：バケツでやった方が早いんじゃないか。

妻：それはないよ。

(=29)

(39) 武村官房長官は与党内に自民案丸のみ論が浮上していることについて「それはないんじゃないか。双方歩み寄りでしょう」との見通しを述べる。

[毎日]

(38)の「それはない」も言い換えるとやはり、「そんなことはありえない」などとなるだろう。当該文は、「バケツでやった方が早いかどうか」という未来のある一時点における事象そのものを叙述しているのではなく、それを一般化したそのようなことがありえないことを述べている。

(39)も同様で、「自民案を丸のみする」という未来のある一時点における事象を叙述しているのではなく、常にそのようなことはありえないことを述べている。

同じ文脈で言い換え可能な以下の「 ϕ ～」を見てみたい。

(40) (38)と同じ文脈で) ϕ 早くないと思うよ。

(41) (39)と同じ文脈で) ϕ 丸のみしないんじゃないか。

これらの「 ϕ ～」は、未来のある一時点における事象そのものを受け、「早くないと思う」「丸のみしないんじゃないか」と述べている。やはり、「それは～」を用いると、話し手の事象に対する気持ちが表されるが、「 ϕ ～」ではそれは表されない。

4. 3 まとめ

4. 1では、「それ」の指示対象が、過去あるいは現在において実現した（実現している）可能性が問題になっている事象である場合を、4. 2では、「それ」の指示対象が、未来において実現する可能性が問題になっている事象である場合を検討した。以下にこれらの「それはない」の意味機能をまとめる。

(42) 「それはない」の意味機能②：実現の可能性（実現した可能性あるいは実

現する可能性)が問題になっている指示対象を、時空間を越え一般化して捉え、「ない」と述べる。言い換えれば、当該の事象は起こりえないことを述べる。

さて、冒頭の例(以下に再掲)もこれで説明することができる。

(43) YK2: ああ。もし10年後学生してたらどうでしょう?

TM3: <笑い>それはないでしょう。 (=(2))

(44) (43)と同じ文脈で) ϕ していないでしょう。

(43)では、「10年後学生を続けている」という具体的事象を一般化し、そのようなことがありえないことを述べている。それに対し「 ϕ ～」は、その事象そのものを受け、「していないでしょう」と述べている。

5. まとめと今後の課題

本研究では、「すべきでない」「ありえない」という意味を持つ「それはない」の意味機能を明らかにした。

まず、「それはない」には、「すべきでない」あるいは「ありえない」という意味を持つものとそうでないものがあることを指摘し、前者の「それは」は判断の主題であり、後者の「それは」は関連の主題であることを明らかにし、本研究で扱う前者を後者と明確に区別した。

そして、「それはない」と「 ϕ ～」を比較し、「それはない」が指示対象を、時空間を越え一般化した上で「ない」と叙述するのに対し、「 ϕ ～」が指示対象そのものを叙述することを示した。

さらに、「すべきでない」「ありえない」という意味が生じる理由にも言及した。「すべきでない」という意味は、指示対象である相手あるいは第三者による行為が、あらゆる時空間においても存在しないと述べることから生じること、「ありえない」という意味は、指示対象である実現の可能性が問題になっている事象が、あらゆる時空間においても存在しないと述べることから生じることを説明した。

さて、本研究の成果は、従来「主題」という語で一括りにされていたものを、判断の主題、関連の主題というレベルの異なる主題を区別することによって得られたものである。この区別は、「それはない」のような「は」を含む言語表現のみならず、「は」との違いが問題になる他の言語形式—いわゆる主題性無助詞や「って」など—の意味機能の解明にも役立つと考えられる。

注

- 1 話し言葉、書き言葉と言っても、書き言葉に近い話し言葉もあれば、話し言葉に近い書き言葉もある。(18)の例は新聞の投書で書き言葉であるが、読み手に対し直接語りかけるように書いているので、話し言葉に近いと判断し採用した。
- 2 実例に関しては、{|}の中に示したのは、最初が原文で用いられていたもの、2番目がその言い換えの候補である。また、「 ϕ 」は主題がないことを表す。
- 3 [名大会話]の例文の()内に示されているのは、あいづちなどの相手の発話である。
- 4 以下、主題を伴わない文を「 ϕ ～」で表す。
- 5 益岡(2004)も同様の分類をしている。「文内主題」、「談話・テキスト主題」と呼んでおり、前者が野田(1996)の判断の主題に、後者が関連の主題にほぼ対応するものである。
- 6 次の状況でも、事実を述べるだけでなく、それが聞き手に向けられていることを終助詞「よ」で表す必要がある。
(料理中に長電話を始めた母に)
料理、焦げるよ。

参考文献

- (1)野田尚史(1996)『「は」と「が」』新日本語文法選書1 くろしお出版
- (2)益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
- (3)———(2004)『主題の対照』くろしお出版

例文出典

[寅]：映画「男はつらいよ」のシナリオスクリプト48話分。句読点がないなど表記が不自然な箇所は、内容に関わらない範囲で原文を変更した。

[名大会話]：平成13年度～平成15年度、科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケー

ション研究」(研究代表:大曾美恵子)の一環として収集された「名大会話コーパス」。30分から60分の雑談を文字化したものが78データあり、会話参加者の年齢、性別、方言はさまざまである。

[毎日] : 毎日新聞1991年から1999年までのデータ。尚、発話者が不明な場合は、「:」の前に発話者を補足した。

尚、いずれも名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻内に設置されている日本語コーパスに含まれるもので、筆者が同専攻博士課程在籍中に例文を検索・収集した。

[実例] : 日常生活の中から収集した実例。

